

新世紀のキャンパス

Campus of New Century

実践女子大学 渋谷キャンパス



校舎裏手は青山の住宅街が広がる閑静なエリア。古くから学園の歴史を見守ってきた大木のクスノキ等を中心とした「校歌の碑の森」などもあり、渋谷でありながら緑豊かな環境で学生たちが交流できるキャンパスになっている。



キャンパスのシンボルとも言える、校舎中心の大きな吹き抜け「アトリウム」で光と透過性を担保し、高層型の建物でありながら明るく奥行のある空間を演出。学生が主に生活する1階から9階までは、エレベーターに加えエスカレーターも備えられている。

六本木通りに面した正面入り口。都市型の高層キャンパスらしい佇まい。近隣には青山学院大学、國學院大学なども存在する文教地区である。



9階にあるカフェテリア形式のおしゃれな食堂。



落ち着いた色味で構成された図書館。自習できるスペースのほか、腰かけるソファや椅子の数が多。

2019年に創立120周年を迎える実践女子学園では、その記念整備事業として2014年4月に渋谷キャンパスを開設した。大学の文学部・人間社会学部と短期大学部が渋谷で学び、日野では生活科学部が学ぶ2校地化となる。「人口減少トレンドに対抗するために、10年後・20年後に入学者を確保する生き残りをかけた移転」と井原理事長は語る。渋谷は社会交流と文化を学ぶ都市型キャンパス、日野は衣食住を学び、地域生活に根差した地域中核型キャンパス。移転を機に新しい実践女子の姿を目指す。

学生募集上の効果は抜群だった。2014年度入試での志願者数は昨年の約1.3倍。広報上の新たな軸ができた相乗効果か、渋谷のみならず日野でも志願者が増加している。渋谷での志願者の出身エリアは千葉・神奈川など、日野への通学が難しかっ

たエリアが増加する結果となった。

「学生が居たくなるキャンパスを造りたかった」と語る高田キャンパス計画室長は、渋谷キャンパスをひとつの街と捉え、街に公園を配置するように学生の居場所を配置し、単なるオフィスビルのようなキャンパスとは一線を画すスタイリッシュで柔らかい空間を造った。都市型でありながら透過性が高く、高低差をつけることで広がりを感じさせるキャンパスは、入学生からも「友達を連れてきたい」と大好評。地上17階地下1階の館内には可動式の仕切りや最新のICT設備も取り揃え、アトリウム周辺の教室をガラス張りとし、否が応でも勉強に集中できる環境で、教員のモチベーションも上がっているという。

もともと渋谷は学園発展の礎を築いた土地であり、都心回帰は「原点(学祖)回帰」の一環でもある。実践

人間工学的に疲れにくいおしゃれな椅子が並ぶ教室。後ろの仕切りは可動性のももあり、開け放つことで広がる空間を利用した新しい授業の形も模索できる。

最も大きい教室は収容定員376人。学部全体のイベントやシンポジウムなどに利用する。



女子学園を創立した下田歌子は、近代女子教育の先駆者であり、国文学者、家政学者でもあった。その業績を体系化し、現在の教育活動に活かしていく必要があるという。「私立大学は志立大学。学祖の想いを体現する教育を実践できているかは、どの時代でも自問自答しなければならない。男女共同参画の時代、リーダーにもフォロワーにもなれる良質な中堅層の育成を目指したい。女子大ならではの教育を創りたい」と井原理事長。現代における女子大学の意義とは、実践女子大学ならではの人材育成とは何か。改めて建学の精神・教育理念を見直したうえで、10年後を見据えた教学グランドデザインを立案し、日野と渋谷両方で教育・研究・社会貢献における改革に乗り出しているという。将来に向けた具体的な改革実現が待ち遠しい。

(本誌 鹿島 梓)



各階教室の識別には、「重(襲)色目(かさねいろめ)」といわれる平安時代の技法をモチーフとした。学祖下田歌子が精通していた和歌をはじめとする美しい日本の文化性を表現しつつ、多様な組み合わせで白い壁に彩を添えている。

1階奥のプラザはインテリア性の高いソファや照明を配置。このほかにも教室以外で学生がくつろげる「居場所」を多く配している。取材時もそこかしこで学生たちの憩う姿が見られた。



効率第一で造るとただのビルになってしまうところを、アトリウムを取り囲むように動線空間を配し、都市型のインテリアを備えたラウンジを造っている。アトリウムに面した教室はスケルトン。カラフルな椅子が透明な空間に映える。